

機関誌「審美と体育」(1927-1928) にみる大日本体育遊技研究会の ダンス教育活動について

廣 兼 志 保

〈研究目的〉

大正後期から昭和前期には、さまざまなダンス教育の方法が開発されその実践が試みられていたことは、すでにいくつかの先行研究によって報告されている。筆者は、それらの一つである「体育ダンス」を主な研究対象とし、特に体育ダンス研究の先駆者であり、普及活動において指導的立場にあった荒木直範(1894-1927)の思想と業績について研究しており、荒木が同時代の他のダンス教育研究者たちと研究会を結成し組織的に研究・教育活動をおこなっていたことが明らかになっている。本研究では、荒木直範が主催した大日本体育遊技研究会を研究対象に「誰が」「どこで」「どんな人達を対象に」「どんな活動をおこなっていたか」について明らかにする。

〈研究方法〉

本研究では大日本体育遊技研究会が月1回発行していた機関誌「審美と体育」を研究資料としたが同誌は散逸のため入手困難であったので、研究会創立の1927年から主幹・荒木の死後新体制出發の1928年までに発行された号で入手可能であったものを用いた。その内訳は、以下の6冊である。
文献①：第2巻第1号(昭和2(1927)年1月発行)
文献②：第3巻第4号(昭和2(1927)年4月発行)
文献③：第3巻第6号(昭和2(1927)年6月発行)
文献④：第4巻第3号(昭和3(1928)年3月発行)
文献⑤：第4巻第7号(昭和3(1928)年7月発行)
文献⑥：第4巻第12号(昭和3(1928)年12月発行)

〈結果及び考察〉

1. 大日本体育遊技研究会の活動目的

文献⑤中の「大日本体育遊技研究会々則 第三条本会ノ目的」によれば

- 一、科学、哲学、芸術ヲ根拠トスル調和統一セル体育主義ノ建立
- 二、凡ユル体育運動ノ研究、教材ノ発表
- 三、特ニ女子及児童体育ノ研究
- 四、体育ニ志ス者ノ學術、品性、教養、並ニ社会的地位ノ向上
- 五、体育理想ノ一般的普及宣伝

が同会の活動目的であり、さまざまな学問や教養を身につけたうえでの総合的体育活動一特に女子と児童を対象にした体育の理論構築・教材開発・普及活動一を目指していたといえる。

2. 「審美と体育」の主な寄稿者

文献⑥の「本誌に寄稿せられたる諸名士録」から、どんな職業のどんな人物が「審美と体育」に寄稿していたかを明らかにしたい。職業または勤務先ごとに主な寄稿者の人数を調べてみた。その結果、学校の教員一特に高等女学校・小学校・師範学校の教員一が最も多いことがわかった。したがって、「審美と体育」は主として初等教育や女子中等教育の教員及び教員養成系の教員を対象にしていたといえる。これは〈結果及び考察〉の第1項で述べた会の活動対象とも合致している。また、ダンス教育においては寄稿者の殆どが会員であったということがわかった。

また、以下の人物名は、記事中の名簿から、女子体育またはダンス教育研究者・あるいはダンス教育書の著者として先行研究の中で名前が明らかにされているものを拾い上げてみたものである。

土川五郎 渋井二夫 小林宗作 大河内泰
藤村トヨ 赤間雅彦 朝輝記太留

これらの人物のうち、渋井・大河内・赤間は大日本体育遊技研究会本部や支部役員として会の運営や指導にあっていたことが「審美と体育」の記事からわかった。朝輝は「審美と体育」に体育史に関する連載を寄稿していたほか、本部講習会で自作のダンス教材を指導していた。これらの人物は、いずれも女子体育またはダンス教育の分野で先進的な教育活動をおこなっていたという点で共通しているといえる。

3. ダンス関連記事の内容

次に、ダンス関連記事50件の内容を検討し、同研究会がどんなダンス教育活動をおこなっていたのかを調べた。その結果、次の事柄が同研究会の主な教育活動であったことがわかった。

- ①会員の自作を含むダンス教材解説・紹介
- ②会員の指導成果・会員対象の講習会・地方支部会等の実践報告
- ③講習会案内

〈結論〉

以上みてきたことから、大日本体育遊戯研究会は、ダンス教育においても、主幹・荒木直範と本部幹事たちが中心となり、機関誌や各地での講習会を媒体として、主として小学校や高等女学校の教員及び各種師範学校の教員からなる会員を対象に、科学・哲学・芸術を根拠とする総合的な教育理論の開発と普及を目指し、積極的な研究活動をおこなっていたことがわかった。その主な活動内容としては次の事柄があげられる。

- ①地方支部の設置による全国規模での活動
- ②体育理論・教材の開発と機関誌の発行
- ③講習会の開催による体育理論と教材の普及並びに研究活動の活性化